



## 「ベストケア」と呼ばれる 会社を目指して

**佐藤 哲朗** (さとう てつろう)

株式会社アルコップ 代表取締役  
郡山市



### 社名は中国の故事から

当社は郡山市と石川郡浅川町で、グループホーム、ナーシングケアセンター等の施設を運営し、介護・福祉サービスを提供しています。よく「『アルコップ』って、どういう意味ですか?」と聞かれるのですが、社名は「Apricot of Leading Corporation」から付けました。「Apricot」というのは英語で果物の「アンズ」のことです。アンズを漢字で書くと「杏」となります。病院や製薬会社等の名前に「杏」の文字がよく使われるのは、実は中国の晋時代に書かれた「神仙伝」という古書の中にある故事に基づいています。

「その昔、中国に董奉<sup>とうほう</sup>という医師がいて、貧富の分け隔てなく、病に苦しむ人に広く医療を施していました。貧しい人からはお金を受け取らず、病気が治るとその代わりに「記念」としてアンズの苗を植えてもらっていました。多くの患者に医療を施し続け、いつしか10万余株のアンズの苗が植えられ、それらが育ってうっそうと茂るほど大きな杏林ができあがったのです。」この故事から、名医のことを「杏林」と呼ぶようになったと伝えられています。

実は、この話には続きがあります。たくさん実ったアンズは穀物と交換し、貧しい者にその穀物を分け与える。さらに実ったアンズを様々な穀

物と交換し、やがて新たに穀物をつくるようになる。このような流れが地域経済のしくみを築いたのです。私たちはこの故事のように、誰もが平等に介護サービスを受けられること、そのために常に前向きで、新しい技術を探究していく、つまり、「杏」の精神を忘れない介護イノベーターでありたいと願い、杏を意味する Apricot から社名を付けました。

### 介護の現場は変革期を迎えている

今、介護の現場は大きな変革期を迎えています。まず、施設の利用者が、高度成長期を支えた人々から団塊の世代に移行しています。戦前に生まれ、高度成長期を支えた人は、与えられたものを素直に受け止める方が多いように感じます。「仕事一筋」の世代ですから、多くを語ろうとしません。しかし、今後増えてくる団塊の世代の人たちは、活動的で多趣味の人が多いように思います。当然、施設には多種多様なサービスが求められます。つまり、画一的なサービスでは通用しなくなるのです。よりフレキシブルなサービスが要求されるということが、これからの介護業界の課題であると考えています。

さらに社会的構造の問題も大きく抱えてきています。2000年に始まった介護保険制度により日本

中に多くの民間介護施設ができました。しかしながら、介護黎明期ともいえるこの時期に登場した介護施設は、必ずしも利用者本位のベストケアを求めたものではありませんでした。介護に関する研究開発と国民の理解が進み、また、法環境もサステナビリティ（持続可能）的に制備されてくると、介護施設を運営する会社の収益確保も簡単ではなくなります。そればかりか、国の目指す介護の方向性に合致できない介護施設は淘汰されていくことになると思われます。これからは時代の変革を正しく捉えることと、介護に対する本気度が試されることになると思っています。

### 介護施設は「終の棲家」ではない

いま述べたとおり、利用者側の変化が施設の多様化を求めてくること、また、施設利用者数と施設数のバランスがとれていないことなど、今後の介護業界は質と量の両面から、これまで以上に厳しさが増してくると予想しています。しかし私は、だからこそ当社の存在価値があると考えています。私たちは、介護施設を「終の棲家」とは捉えていません。もちろん、施設を利用している方々にのんびりゆっくりと過ごしてもらうことは大事



～ MORE SMILE ～ 笑顔がより多く増えることをめざして。

なことですが、それ以上に「生きる」ということ、もっと大きく言えば「個人の尊厳」について思いを寄せているのです。当社の介護施設は「利用して」「元気になる」「社会復帰する」ためにある、というのが私たちの基本的なスタンスなのです。そこから様々なアイデアが生まれてきます。新しいサービスは、常に新しい知識を得て、視点を変えることから生まれてくると思っています。

### 介護の仕事を支えているのは「ありがとう」

皆さんは「看取り」をご存じでしょうか。人はいつか亡くなりますが、よく「病院ではなく、自宅でその時を迎えたい」などと聞きます。私は、病院や自宅で亡くなるよりも私たちの施設で亡くなるほうが良いと考えています。すなわち、家族はもちろん、一緒に過ごした入居者、お世話したスタッフからドクターまで、かわるがわるに手を握って、その時を迎える。これが看取りなのです。先日、ある女性の入居者が天に召されたときに、手を握ったスタッフに笑顔で「ありがとう」と言ったと聞きました。人生の最期に感謝される仕事はなかなかありません。人と人とが深いところで交われるのが介護に従事する意義であり、また、魅力でもあります。

### 「笑顔」が一番

私は介護には何にもまして「笑顔」が一番だと考えています。まず利用者の方々の笑顔を生むためには、今の感情や気持ち、思いを理解し、その人が笑えば共に笑い、その人が悲しめば共に悲しむ。たとえ一瞬だとしても「幸せ」と思える感情がより多く得られ「心からの笑顔」と「本当の心の居場所」が実感でき、そこに安心感、信頼感、そして感動が生まれると思います。そして、その方々に寄り添えるのは、スタッフ一人ひとりの心でしかありません。私はスタッフが自らの創造性と豊かな発想で、伸び伸びと楽しく介護実践ができる環境づくりに重点を置いています。地域社会、利用者の方々、ご家族、スタッフなど関わるすべての人に、笑顔がもっと多く増え、もっともっと楽しくなるようにしていきます。「アルコップ＝ベストケア」と呼ばれる会社をつくっていかたいなと思います。